「え、フェイトママ、帰ってこれないの？」
　見た目にもはっきりとわかるほどに、がくり、と肩を落としながら、ヴィヴィオは消え入りそうな声でなのはに問いかけた。
「うん、そうみたい。フェイトママ、お仕事が終わらないんだって」
　通信を切ったなのはが、残念だけど、とヴィヴィオの肩に手を置く。
　うつむいたままなにも答えないヴィヴィオに、なのはは腰を落として目線をヴィヴィオに合わせた。
「フェイトママも、ヴィヴィオやみんなのためにがんばってるから、だから、ね？」
　眉根を寄せ、困ったように微笑みながら、なのはがヴィヴィオの頭を撫でる。
「……うん、フェイトママ、お仕事だもんね」
　大丈夫、わかってるから、と口ではそう答えたヴィヴィオだったが、その肩はいまにも泣き出しそうに震えていた。
　なのはがヴィヴィオの背中に両手を回して、その身体を包むように抱き寄せる。
「わかってる……けど、だけど、せっかく、明日はみんな揃ってお休みだったのに」
「そうだね、本当のことを言うと、なのはママもちょっと寂しいけど」
　それは、なのはのまったくの本音だった。
　フェイトに会いたい、という想いは、この世の誰よりも強いという自覚が、なのはにはある。
　久しぶりの、家族三人揃っての休日。しかも、フェイトは長期任務中だったこともあり、帰ってくるのは実に一ヶ月ぶりだった。それが流れてしまうのは、ヴィヴィオにとっても残念だろうが、なのはにとっても辛いことに代わりはなかった。
　だが、だからといって娘の前で一緒になって泣いているわけにもいかない。
　それになにより、一番辛い思いをしているのは誰あろうフェイト自身だということを、なのはは理解していた。
「だけど、フェイトママはいつだって、わたしたちのことを大切に思ってくれてるから。だから、わたしも、ヴィヴィオも、フェイトママを困らせないようにしないと、ね」
　ヴィヴィオの頬に手をあてて、なのはが笑いかける。
「うん、ごめんなさい、なのはママ。わがまま言って」
　その手を取って、ヴィヴィオが小さく頭を下げた。
「いいんだよ。ヴィヴィオは強い子だけど、ママたちの前でくらい、わがまま、言ってくれても」
「ううん、だめなの。フェイトママとの約束だから」
「約束？」
「約束。ヴィヴィオは強い子になって、フェイトママがい

ないとき、なのはママを守るんだって。そう約束したから」
「ヴィヴィオ……」
想像もしていなかったヴィヴィオの言葉に、なのはの胸の奥がかすかに締め付けられる。
「そっか、そんな約束、してたんだ」
「フェイトママがお仕事に行く前に、いつも指切りしてたの」
その光景は、なのはも何度か見たことがあった。
なにをしているんだろう、と気にはなったものの、フェイトもヴィヴィオもそのことについてなにも言わないので、なのはもあえて聞かないようにしていたのだが。
「じゃあ、約束、ちゃんと守らないとね。大丈夫、ヴィヴィオは強い子だから」
「うん！」
そう元気よくうなずくヴィヴィオを見て、なのはは逆に自分が感極まりそうになるのをなんとか抑えながら、それでもヴィヴィオにいまの自分の顔を見られないようにと立ち上がった。
「さ、それじゃまずは夕飯の片付け、済ませちゃおうか。ヴィヴィオ、手伝ってくれる？」
「うん、任せて！」
ダイニングテーブルに並べられた皿を意気揚々とまとめ始めるヴィヴィオを眺めながら、なのはは心の中でつぶやく。
フェイトちゃん、ヴィヴィオはちゃんと約束、守ってるよ。
だから、できたらフェイトちゃんも、答えてあげてくれると嬉しいな。
その願いは、半分はヴィヴィオのためであり、もう半分は自分のためでもあった。
ヴィヴィオのため、一時的に前線から身を引いているなのはと、ほぼ最前線と言ってもよい場所にいるフェイトでは、局にいてもめったに出会うことはなく、またフェイトは今日のように家に帰ってこられないことも多いため、二人がともに過ごす時間は以前に比べ大幅に少なくなっていた。
会いたい、な。
思わず声に出しそうになるのをなんとか飲み込みながら、なのははエプロンをしてシンクの前に立った。
ヴィヴィオが持ってきた食器を一つ一つ、ていねいにすすいでいく。
次にフェイトが家で食事をするとき、綺麗な皿で気持ち良く食べられるように。
それはヴィヴィオも同じようで、なのはが洗った食器の水を切り、ガラスのコップなどは水滴が残らないようくまなく拭いて棚にしまっていく。

そんな娘の姿を見ながら、なのははフェイトの言葉を思い出していた。
「なのはとヴィヴィオは、似たもの親子だね」
そのときは、そうかな、と首をかしげたものだったが、いま自分の隣に立つヴィヴィオの姿を見て、その言葉の意味が少し理解できたような気がした。
たしかに、自分とヴィヴィオは似ているかもしれない。
少なくとも、フェイトのことが好き、フェイトに喜んでもらいたい、という一点においては。
てきぱきと鼻息も荒く片付けをしているヴィヴィオの姿を見て、なのはは苦笑する。
それも当たり前か、と思う。
わたしたちは、親子なんだから、と。

「ん……」
まどろみの底から、ふわり、と浮かび上がるようにして、ヴィヴィオがゆっくりとまぶたを開く。
薄明かりに浮かび上がるのは、見なれた自分の部屋の天井だった。
身体を起こして、時計を見る。
まだ深夜、と言っていい時間だった。
「あれ……」
なぜ目が覚めてしまったのか、自分でもわからない。
日々のトレーニングのせいもあってか普段から眠りが深いヴィヴィオにとって、とくにトイレというわけでもないのに夜中に起きてしまうというのは、これまでにほとんど経験が無かった。
「お水、飲もうかな」
かすかな喉の渇きを感じて、ひとまずキッチンへ行こうかと部屋を出る。
と、廊下の向こうがぼんやりと明るくなっていることにヴィヴィオは気づいた。
「あ、なのはママ……？」
奥は、なのはとフェイト、二人の寝室だ。
見ると、部屋の扉がかすかに開いており、そこから光が漏れている。
まだ起きてるのかな、とヴィヴィオは灯りのほうへと向かった。
音をたてないように、ドアの隙間からそっと中をのぞき込む。
なのはは、ベッドの脇のテーブルに突っ伏していた。
かすかに背中が上下しているところを見ると、おそらく眠ってしまっているのだろう。
なのはの目の前には、写真立てがあった。
なのはとヴィヴィオ、それにフェイトの三人で写っている写真。